

新書紹介

漂流へ 芹沢俊介家族論集

芹沢俊介著

春秋社 A5判 三〇八頁 一七〇〇円

「戦後社会の性と家族」(東京白川書院一九七七)、「家族の現象論」(筑摩書房一九八一)、「女性はいまどこにいるのか」(毎日新聞社一九八三)、「対幻想」(春秋社一九八五)、「イエスの方舟論」(春秋社一九八五)と、家族の問題を重要なテーマに著作活動を続けている著者の家族論集。ここ数年のあいだに発表された論考を収録している。

現在家族は解体、崩壊の危機に直面しているという。そしてその原因を家族におけるエロスの減衰というところに求めようとするのが芹沢の一貫した姿勢である。

ところで芹沢のいう家族におけるエロスとは何であろうか。

この、いわば芹沢の家族論のキーワードとなるタームの概念がいまひとつ深く検討され、明確に規定されていないというらみがある。いまのところそれは「家族」という共同体を成立させている

「磁力」ないしは「家族の成員をその家族に帰属させるアトラクティブなエネルギー」というレベルでの理解よりもそれほど深化させたものではないように思える。

たとえば、芹沢と同じく子供、家族、女性といったテーマに鋭い思想を展開している小浜逸郎は近著「方法としての子ども」(大和書房一九八七)のなかで人間を社会的かつエロスの存在であるとしたりえで、エロスの

という概念を社会的という概念とのパラドキシカルな関係においてとらえ、次のように規定している。「エロスのとは、人間が一つの個体から二つの個体への分離として自己の生をもたらされるという発生的事情を、根本的矛盾(主題)として生の課題のうちにくりこみ、そしてその課題の解決(解消)を、対な、関係の展開のうちにもくもくもとする営みのいっさいを指している」(傍点小浜)

人間におけるエロス性についての極めて的確な規定であると思う。しかし、芹沢が用いているエロスという概念は、もっと現象論のレベルで把握されているものであり、この小浜の概念ほど存在論的なルーツにまで立ち帰ったものではない。いわば、こうした人間の存在性が「営み」の一つとして日常的な、あるいは、現実的な位相で発見されたものと理解できる。かつて、「ばば」というユニークな風俗批評をテーマとした雑誌を主宰し、またイエスの方舟事件、「神の花嫁」焼身自殺事件などに深い関心をよせていることか

らも量られるように、芹沢の近年の関心は、「現在」をその最も表層に浮遊するものの中にとらえようとすることにあったわけだが、その視座からでは死角になる部分も生じて来るように思える。

先の小浜の定義を援用し、さらに一步論を進めるならば、エロスを生成せしめているのが、人間が存在の根幹に被っている欠如、瑕疵(という認識)であるならば、その欠如に対しての充足の実現のみが、問題を解決する、即ちエロスを減滅しうるということになる。これは、

たとえば、セクシュアリティの問題で語れば、パンセクシュアリティといういまのわれわれには不可視的なありようではない。

家族というのが、このようにエロスのトートロジカルなロゴスを根底に持ちながら制度にまで登りつめた、それ自体ひとつの矛盾であり欠落を食みつつ堅固に育ってきた装置であることからすれば、そうしたやすく解体を許すものではないだろう。いみじくも、「あとがき」で芹沢

は書いている。「家族のエロスの衰弱を、家族のエロスが成立する水準がとつともなく、高度化してしまったのだ、というようにとらえ直している。……」

「……」本書に、「漂流へ」というタイトルが選ばれているのは、高度になった家族のエロスの水準を前に、家族が解体せず

に自己を新しく組み替える可能性を、浮遊から漂流へという主題が転位する方位に求めようとしたからである。」

家族という方舟の現在を難波とではなく、漂流ととらえようとする著者の、新たな家族論の萌芽がここに見られる。

なお、収録稿中、「家族の戦後史」と題された一文は、横浜市図書館主催の六十年年度母親読書教室における講演録である。

▲教育委員会事務局図書館
普及課普及係・篠原 一郎